昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十一年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

二〇〇号記念

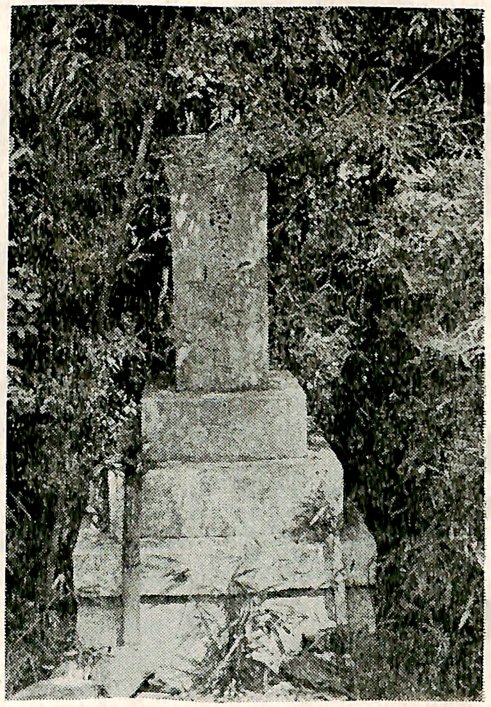
（通第二〇〇号）

慈光

第十八巻　第一号

目次

予が宗教的実験……近角常観……(2)
仏は心想中に入り給う……和才誠司……(9)
菅瀬芳英師書簡と筆談……(11)
ルーテルと親鸞……福島政雄……(16)
池山先生聞記……花田正夫……(23)



近角先生の御尊父、慈光院釈常隨師の墓碑であります。

常観先生も、常音先生も御遺骨をここに納められました。「父から信心も肉体も頂いたのだから別に墓はいらぬ、父の墓におさめておくれ」との御遺言に随がわれ、常音先生も亦同様にせられました。「亡き骸を河茂川へ」と仰せられた聖人の遺風がしのばれてなりません。（編者記）

予が宗教的実験

近角常観

つい近頃のことのように記憶しているが、誰であったか私に向って「君の信仰は誰より継承したか」と尋ねられたことがあった。そう尋ねられて見るとすぐに答が出来ぬ。有体に白状すれば沢山先輩より教を受けて大なる感化を蒙っている。恩師も多けれど自分の信仰の中心たる部分は誰より授かったと云うことは云い難い、強いて言えば、仏より授かった、そしてその信仰の定まったのは苦悶した時じや、と答えた。

ところがつい先達っての事であったが、此度いよ〳〵父と別るると云う時になって、初めて自分の信仰は全く父より継承して居たことに気がついた。苦悶時代を始めとして色々の宗教的経験をしたが、かくの如き困難の時に、蔭に居て非常なる念力を以ってこれを守ってくれた人は親であったことに気が付いた。猶一歩深く考えるに、この如き経験をなすべき性質、それ自身が親よりの遺伝であった。これを養うて下さったのも又親たることに気がついた。

日出でては耕し、日入りて憩う、井を掘りて飲み、自ら耕して食う、帝力何ぞ我にあらんや、といつかど自分でやったつもりで、帝王の存在に気がつかぬのは、堯帝の徳化があまり大なるからである。

我信仰の如き、実にその趣がある。自分が実験したと考えているが、首をめぐらせば、其実験が皆親の賜で出来ているのであった。思えば実に広大なことである。

私は全体子供の時から物事を思いつくと言い張ってきかぬという性質があった為親にどれ程心配をかけたか分らぬ。たしか七八才の時、京都の病院へ連れられて行った時診察が終って他の同行者がその日に大津に帰ると云うたら私も帰りたいと言ってきかぬ、泣き出してきかぬ。それがため父は、日暮れより大いなる子供を負うて滋賀谷越を暗夜に三里、手さぐりで越えられた。その同行者が皆婦人である上に、その自分には強盗、追剝などが出るという噂があって、頗る気味が悪るかったと一代話された。暗い小路

から山科街道の明るい所へ出た時は、子供心になお覚えがある位なれば、もの凄かったに違いない。昨年の秋頃この道を通りて言うに言われぬ感慨を起した。かくどうでもよい事には親がどれ程苦労してでも言うことを聴いて下さった。それがため物事に挫折せず意志を固くする様に養われた。かく私は物事に固執するにかかわらず、頗る内弁慶で、人の中でも人の言うことに従う風であった。実は従うのではない、心中頗る不満なれど、なお適切に言えば、他が悪いと思えど、これに抗議することの出来ぬ風であった。一時は「負けるのは勝つのじや」と考え、盲従を以て謙譲の如くこじつけて道徳を行ったかの如く自ら慰めて居った。

然るに或時、母が新に織りて下さった衣服を着て遊んで居ったが、勿論あやまちであったが、他の子供にさん〳〵に泥を沢山つけられて帰って来たら、何時も優しい父親が決して承知されぬ。

「他人に泥をぬられておめ〳〵帰って来る腰抜けがあるものか、是非とも泥をつけた奴に洗わしてこい！」

と叱って、決して家に入れて呉れられぬ。其時ほど自分の意気地無しにあきれて、父親の大打撃によりて、体面を保つことと、謙譲とは大いに区別すべきことを悟った。むしろ正しき事のためには、如何に苦しくてもこれを主張せねばならぬという考えが養われた。本来私は臆病であったのであるから、他に泥をつけられて、これを洗って返せと抗言するよりは、泣く〳〵でも自分の不利益に甘んじてる方がどれ程自分の気に叶ったかしれぬ。されどこの活ける教訓によりて従来性質になかったものが出来たように今に感じて居る次第である。

我を育つるために、又我に学問させるために、非常な苦労されたことはおびただしいけれど、それは略して、信仰といえば、前にも有体に書いておいた通り、父はしきりに法を喜ばれ随分遠方まで求めに行かれたことを記憶する。ことに門徒を感化し、夜会を催し、談話会を設け、懺悔を聞くなどのことを皆行われたは勿論、これはわが親ばかりではない、仏教の盛んなる地方にはあることなれど、父のやりかたは頗る真面目であった。それ故父は偽の懺悔をしたり、道徳家ぶったり、殊勝らしくするのが大嫌いであって、飾なき正直を好まれた。実意なき浮薄な人などは話をしたり同席するのも嫌われた。

現に父が臨終の時も、その喜び様は平生と毫も変らなんだ。ぼけ気味があったからにもよろうが、身体の苦と心の安心とは別になって居った。平素よりは特に念仏を多く称えるという様なことはなかった。実に変らぬ正直な真面目な確な点は自分の親ながら実に稀な人であった。悪いことを善くつくろうという様なことは毫もなかった。悪かった

ことは悪い、仕方がないことは仕方がないという性質であった。「常観などもどつとせぬ」と云われたのはこの点より眺めてなお程遠いのを直言されたのであろうとひそかに愧ずる次第である。勿論深き学者でもなければ、高き徳者と云うでもなけれど、この性質を見聞して居たために、私は親鸞聖人の人格、信仰、宗風など幾分か理解することが出来る様になったように感じている。かく色々の点より感化を蒙りたれど直接に自己の信仰、実験の告白に進むこととしよう。

しばしば言う通り、私が信仰らしきものを得たのは明治三十年の苦悶時代である。其時の事実、心の有様などは、『宗教的同朋』をはじめとして、たび〳〵言うたから止めにして、其時父が如何に心配して呉れたか、其時の病気が癒ったのはたしかに大もとは仏の慈悲に違いないが、此世では親の念力に助かったに違いない。夏休暇中故郷に居て日夜昏々としてふさぎこんで居た時、父がどうかしてこれを癒してやりたいと思い、大層心配して呉れたも、一年で大学卒業という間際まで漕ぎつけてこの有様は何たることである、命長ければ恥多しと云うことがあるが、自分もえらい死恥をかいたことである、しっかりやれと戒めてもみたり、自分は余命もなき身体なれば代れるものならば代ってやりたいと念じてくれられた。

その苦悶の最後が筋炎と云う病気になって長浜病院に入ることになった。その苦悶の有様は信巻に御引用ある涅槃経の阿闍世王の苦悶そのままであった。その時両親の心配は一通りではなかった。切開を行わねばならぬという時、衆人がせめて大阪か名古屋で手術を行うた方がよかろうというたが、父は一点の躊躇もなく断然直ちにこの病院で行って下さい、幸にして本復するか、これで終るかは全く本人の運であるというて決心が堅かった。それが時機をおくれずに大いに経過が良かった。

この苦悶時代における内的経験は沢山あるが、後になれば、親の慈悲さえも感ぜぬ石の様な有様に陥ったけれども心の底には親という考が潜んであったものゆえ、軽々しいことはしなかった。其時の感じを書いたものがあるが、親のことを心配して書いてある。又大経の第五悪段を読んで一言一句皆自分のことを書かれた心地して深く懺悔した。

「父母教誨すれば目を瞋らし怒りことう」と云い「譬えば怨家の如し、子無きに如かず」などは、胸に針をさされる気持がした。

たしかに苦悶時代を泳ぎ付けた唯一の生命は親であったそしてこれを保ってくれたは全く親の念力であった。かくして初めて仏陀の慈悲が心の中に生きて下さった。それから二三年間は、恰も苦悶の反動として非常なる確信の上に

打立って仕事をする様になった。親にしては又も心配させることになった。世間では善いと讃めてくれる人もあれば悪いと非難するものもあったが、親の心では、善も悪も超絶して、唯々法のためにその所信を貫徹させたいの一念より外はなかった。

明治三十年より三十三年までは、我信仰を確立し、又信仰の力を実験した時代であった。この世における唯一の生命は親であった。

三十三年、航西の時、殆んど生別の覚悟で別れたが、其別れる時に、実に勇ましく最も屈托ない顔をして「十分やってこい、サヨナラ」と云われた時、初めて我親はあれ程決心の深い人であったかと大いに驚いた次第であった。

されど、予の航西中は、一寸の間も面白いことがなかったと、後にて話された。航西中の宗教的経験は経文を味いこれを活かして行こうということであった。その大体は「読経余瀝」に書いておいた。かくなる源は父より授かった三部経の点本を西洋へ携帯したことであった。なお一層もとを思えば、全体親は経文が好きで、私が七才の時、自分が阿弥陀経を数行かいて、私にも数行書かし、みな写さして下さった。これも昨年発見してそぞろに親の慈悲を感じた。

又十二才の頃、特に大なる三経の点本を求めて、それを訓読することを教えて下さった。其時養うた習慣があらわれてやがて西洋に於いて経文を味うようになった源である。

全体西洋の宗教事情を取調べた所で、宗教そのものが違う故、これを仏教改良の参考にするには仏教それ自身の上に於いて根底を見出さねばならぬ。而して経文はたしかに根底になったのである。かかる西洋の宗教を視察して、これを仏教の上に応用する生命は、親より賜った経文は信仰経験の塊であるという考より釈尊の伝なども大いに味うようになって来た。

又他人より御覧になってはつまらぬ話なれど、私には大いに感激していることがある。たしか私が高等学校にいた頃であると記憶するが、一日父が弟に向って、私に撃剣か柔術を習わしておきたい、なんとなれば他日洋行するようなことがあった時、私は力が弱く身体が小なる故に、西洋人にあなどられてはならぬと云われたとのことであった。私が帰省した時、弟よりこれを聞き、さては親たわけにも程がある、我には他の人とは異りて洋行すべき機会のあるべき筈もなく、又すべき望もない。それにかくの如きことを言わるるは可笑しきことであると考えたことであった。久しくこのことは忘れてしまい、西洋に行きながら一度も思出しもせなんだが、一昨年の二月四日未明ベルリンの宿で床に居る時に、ふとそのことを思い出した。その時の感激は実に甚だしいことであった。思いめぐらせば十四五年

前のこと、何もかれこれ云うべきことでもないが、時勢の変遷によりて親の云われる通りかく万里海外に居ることになっているかと考えたら親の慈悲やら、仏の御恵みやら胸に塞がって感涙にむせびとても横臥しているわけにいかず早速床より出でて口を嗽ぎ顔を洗い、満身の感謝を以て大経を訓読し始めた。上巻半分程読んで夜が明けて学校へ行くべき時間になったから出掛けた。其日正午、宿へ帰ったら日本から急用があるから帰れという電報が来てあった。何用か分らねど、この朝の所感が強かったために、道理、理屈なしに早速帰ることと決心して直ちに出立した次第である。

三月二十四日、長崎に着した時、何気なく電報を打ったら故郷では、父が母と電報をとり合いをして、諸根悦予で身体中が嬉しいと言われた、それを聞いて我身ながらその不孝を自覚した。

帰朝以後今日まで三年間は細々と伝道に従事している次第であるが、この間には内心に於いて色々の経験をした。極く要点を言えば、行ということが分かるようになった。五台山の仏陀波利、普陀落山の慧夢などの事に感じて、即ち行によって仏の力を感得するということが分って来た。

抑々前々からの宗教的経験をまとめて見れば、明治三十年の苦悶時代より、三十三年までは信仰の基礎を置きた時代である。それより以後一生の間は色々の方面より経験を深めることと考えている。即ち西航中、経文を味う様になったは、教行信証の真実教の味わいである。

然るに其教の真髄を簡潔にして見れば行になるのである華厳経は普賢行願品に収まり、法華経は安楽行品に収まり般若、文珠の徳は尊勝陀羅尼に収まり、観音慈愛の徳は大悲心陀羅尼に収まる。そしてこれらの行は夫々の教にあらわれたる仏菩薩の力を感得することが出来る。この諸仏菩薩の中心たる弥陀仏の教は、又南無阿弥陀仏の大行の中に収まる故に、この一行、即ち諸善万行の精髄である。即ち念仏は無碍の一道であることが分かった。してかく道理ずめに悟ったのではない。人生実際の問題の上よりして非常に苦労して確かに其仏の力なるものを実験した。これ即ち真実行の意味となる。ここで始めて法然聖人の念仏一行を標榜された訳も分かり、親鸞聖人が、其仏の力を信ずる信をもって受けられた訳もわかった。

明治三十年の時経験した信仰、即ち真実信の有様は、これがために最も明瞭になった。『歎異鈔』第二章の「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」という意義は、まず〳〵明瞭になった。今までは信仰ということは一点のゆる

みなく喜んでいたが、念仏ということは十分にわかって居らなんだが、今ではこの大行の味わいがわかった。二三年来の『静観録』を反覆して御覧下さい。畢竟この経験の外はない。これがため従来教条的、むしろ教権的になってあった十七十八の行信関係が実験的に明瞭になって来て、従来こじつけの様にしか思われなんだ法然聖人と親鸞聖人との関係も成程かくあるべき筈と考うる様になった。

かくて従来さほどにも思わなんだ教行信証なるものが、非常なる意味深きものとなって、仏教の真髄を実験する経過における必然の範疇であると考うる様になり、従って教行信証の御延書を非常に渇仰することになった。かく私が自分一人で苦労して仏の力を経験した様に思うていたが、私がかく色々と経験しつゝある間、故郷の親の様子を熟々聞きて見ると、亦全く同様に我がために念じて居てくれられたのであった。魚が卵を孵化するのは、その念力であると聞いているが、親は息の切れる時まで徹頭徹尾子を護念して下さった。

さて全体私は性来習慣であるが、これも親の養いであろうか、仏が実在して居られ、極楽が現存してあるという観念が深いので、七宝荘厳の浄土が嬉しいのである。或時、清沢師が「善導さん風じゃ」というて笑われたことを記憶する。されど私が信仰を確立した時に、罪悪感ばかりで、無常観がともなわなんだ。筋炎の病の時なども、一命が危うかったのであったが、唯自己の罪悪のために苦しんだので阿闍世王の慚愧の心は十分あったが、未来堕獄の事を考うる余地が無かった。それがため信仰を得た結果平素仏陀の慈光に接して喜んで居って、死んだら益々親しく如来に接することに疑わなかったが、平素常にそれを楽しむという様にはなれなかった。これはたしかに罪悪観から入って無常観が著しくなかったからであると考えている。教行信証の味わいが十分わからなんだ。

しかるに今度は親が事実を以てこれを教えて不さった。このことは前に十分書いたから御承知下さったことと信ずる。従来は信仰の方面を強く言うため平生業成、即得往生の意義は十分にわかったが、ややもすれば一益法門的になりそうであった。光明中の生活とか、浄土の実現など云うては居るが、この人生の上では十分の所には達せられぬ。旧来の信者が極楽往生の観念が主となって、人生のことを度外に置く弊を矯めるために、青年の信者は人生上の安心を強く言うはよけれども、未来の観念に乏しき弊がある。私の如き、生来七宝荘厳の浄土も嬉しがって居りながら、なお適切でなかった。然るにこの度、父の示寂によりてわかった。成程親鸞聖人が彼土得証の真実証を説破せられた意義が明らかになって来た。宗教の極致は現世に於いては

決して理想の極に達することが出来ぬことが分ってきた。厭離穢土、欣求浄土は宗教の極致であることが分った。

信仰の上よりは常行大悲の徳によって出来得る限り人のためにも謀り、仏のお慈悲を伝えたいと考えて居るが、この世に居る間に為すだけぐらいは実にいささかの事である

真実の衆生済度などは思いもよらぬ。一旦浄土に入りたる後、再びこの世界に還来して永久に普賢の徳を行う境に達して理想的の衆生済度さして下さる事が実に嬉しい。慈悲に聖道浄土の区別ありて、聖道の慈悲は此世にて人をいとしがり、はぐくむことなれど、浄土門の慈悲は、浄土に往生してから六道四生、いずれの業苦のあるところにても自由自在に済度することであるという、還相廻向の意味が明らかになって来た。我父も今ではこの境に入らせて菩提の薗林遊戯の功徳を行い、我々の為すことを見ていて下さることと、何となく生みの親は永久の親となって下さった事を信じている。かくの如く死後までも私に信仰の実験を与えて下さった大恩は忘るることが出来ぬ。

なお真仏土、化身土に対する経験もあるが、これはまだまだ味いたいと思うている。勿論以上書いた真実信、及び真実の教行証の味わいも、もっと深く味おうてから発表する心算であったが、父が私の宗教的経験の上に加えて下さった念力大なるを披瀝せんと思うて思い出し次第に書きました。思想がまとまって居らぬので読者諸君に向って恐れ入る次第で御座います。

（明治三十七年四月、稿了）

天下何の処か感謝なからん

筆をとりて感謝を描かんとす。天下何の処か感謝なからん。何物か感謝の資料ならざるべき、東籬の菊、深山の霜葉、何れか感謝の情を催さざるべき。

元祖聖人は天の星を南無阿弥陀仏とのたまい、蓮如上人は衣の襟を御たたきありて、南無阿弥陀仏よ、とのたまう。

問うこと勿れ、何が故にしかるかと。答うることなかれ、某々の理由を以てしかるなりと。

吾人は唯々尽十方無碍の御恵みと聞けば胸おどる心地し、芥子の地も捨身のところにあらざるなしとうけたまわれば、訳なくして涙おのずからあふる。

嗚呼、筆も南無阿弥陀仏、紙も南無阿弥陀仏、

「求道」四巻六号。近角先生述。

仏は心想に入りたまう

和才誠司

私はこの夏、北川鼓山画伯から暑中見舞を貰った。見舞状は官製はがきに風鈴が描いてある。絵はただ風鈴だけであるが、これを見て居ると涼風を感じ、鈴の音が聞こえる

元来、風や音は姿かたちが眼に見えないから、絵に描けない筈であるが、それを短冊のヒラヒラした形で画面に涼風を描き出し、風鈴の動いているところに、その音を写し出してある。芸術の神秘さ、尊さに今更ながら頭がさがる。

これについて考えさせられるのは、これを貰った時期である。若しこれを寒い冬に貰ったのでは感興が薄い。四季折々の季節を心に味わい、これを満喫するため、季節に応じ床の軸物を掛け換えるのもなるほどとうなずける。

此の如く世の中には、眼には見えぬが実在するものが数多くある。心もその一つである。心は眼に見えぬが、その人の言行に因って、あたかも風の如く、風は見えぬが、風鈴の動きを見て、風が吹いていると心に思うように、心もその人の言行を通じてその是非、善悪をお互に批判して居る。

如何なる人と雖も、空気、音声、心の実在を否定するものはあるまい。だから眼に見えぬからとて、その実在を頭から否定することは出来まい。

実に勿体ないことであるが、阿弥陀仏が直接肉眼に見えないからとて、その実在が疑われているようである。なるほど、仏は風の如く眼に見えぬが、その働きをたしかに心に知ることが出来る。阿弥陀仏は肉眼に見るのでなく、仏の心が私の心に触れてはじめて印現する。

観無量寿経、第九、真身観に『仏心とは大慈悲是れなり』と示されてある。信仰は私の心の問題であるから、私の心に阿弥陀仏の大慈悲を頂かねば解決は出来ない。私のあさはかな考えや、世間の常識では、絶対不可能である。信仰は、間違いないお救いに、間違いないと安心するのである。

親鸞聖人は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうぶりて、信ずる外に別の仔細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に堕ちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。』（歎異鈔、第二条）

と、弥陀の誓願不思議を、御不思議とそのまますなおに自然法爾に頂かれて、私に信仰の受け取りかたを示されている。阿弥陀仏のお慈悲がわからぬと云うのは、聞きそこねているからである。

真宗信者をもって任ずるお同行の中にも、心の奥底にただの一度でよいから、この眼で阿弥陀仏を拝みたいと思うものが無いともかぎらないが、阿弥陀仏は、いつでも、どこでも私に救いの手を差し延べて居られるから、心の眼を開いて、恒に私のそばにましまして照護したまう阿弥陀仏に気づき、私の無明渇愛の煩悩を打ち破って、浄土まで強く生きぬかせて頂くのである。

人によりて宗教に対する考えの違いは、全く宿業の催す故であるを強く感じさせられる。前の風鈴の例で云えば、愚鈍な無感覚な私が、風鈴の絵を見て、涼風や鈴の音を感じさせられたのは、画伯の芸術の力に因ること勿論であるが、私がかって炎暑に悩まされ、風鈴の音を聞き、風の涼しさを体験し、絵を見た当時も、尚且暑さに苦んでいたから涼しさを強く感じたのであろう。

私の罪悪のふかさを知らされることによって、いよいよ阿弥陀仏の大慈悲心を知らされる。私の宿業のふかさを知らされることによって、私の芸術に対する憧憬をふかくし仏恩をいよ〳〵感じさせられる。

世の中には偶然と云うことは唯の一つも無い。私が絵を見ての感想は実に平凡な日常の茶飯事であるが、かかる些細なことまでが、私がかっての暑さについての体験——宿業がなかったならば、如何なる名画を見ても、感想は起らなかったであろう。

私の宿業のきびしさを深く肝に銘じ『兎毛、羊毛のさきにいる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずということなしとまさに知るべしと聖人はかねて仰せ候いき』（歎異鈔第十三条）の味わいが津々として尽きず、宿業を強く感銘させられる。

私は今、幸いにして、値いがたい仏縁に値うことを得て遠く宿縁を慶ばして頂いている。

昭和四十年九月三十日　校了。

菅瀬芳英師 病中書簡と筆談

病中書簡

（註）先般小火をした生家（広島県安佐郡祇園、西本清吉宅）の土蔵の中にあつて水を被つた書類を整理して居た時に発見した菅瀬和上の書簡です。御往生の前年（大正五年）十二月十五日のものと思われます。当時私は二十五歳でありましたが度々聴かされた御法話であります。昔を回憶してあまりの懐しさに写真版にした次第です。西本清三記。

……○……○……

東京帝国大学付属病院皮膚科病室四号

菅瀬芳英

西本清吉様

拝復　御手紙拝誦、御見舞下され難有奉銘謝候。病症は例の固疾に候えば依然たるものに候えども、道友諸氏の勧めにより去る六日入院仕り静かに療養まかりあり候間はばかりながら御放念下され度候。

『勿体なや乗彼岸（上皮癌）にて到彼岸』

と云うようなことには未だ業が尽きず候間参りかね候らしく候。

大無量寿経『徳を為し、善を立て、心を正し、意を正し、斉戒清浄にして一日一夜すれば、無量寿仏国に在りて善を為すこと百歳に勝る。ゆえんは如何とならば、彼の仏国土は無為自然にして、皆衆善を積み毛髪の悪も無し。此において善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土に於いて善を為すこと千歳に勝る。他方仏国には善を為す者多く悪を為す者少し』

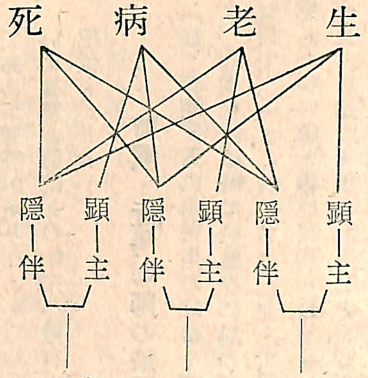
とあり候通り、此五濁悪世に於いての御報謝は、一日が百歳に当るとあり候間、可成的療養して御報謝を軽く思わぬ様、唯能常称如来号とあり候えば、唯能く常に々々…南無阿弥陀仏より外御座なく候、南無阿弥陀仏。

達者な人も死し、病人も死し、子供も死し、此世の人は〳〵てみな死し候。けれどお互に本願に乗托いたし候ものは生きるのて生きして南無阿弥陀仏……往生の味いは此にあり候

往生の一路　平生に決す
今日、何ぞ死と生を論ぜん
蓮華界の楽を好むに非ず
婆界に還来して群萌を化さん

とは法霖大徳の末後の偈に候。

安楽浄土に到るひと　五濁悪世に還りては
釈迦牟尼仏の如くにて　利益衆生はきわもなし
南無阿弥陀仏の廻向の　恩徳広大不思議にて
往相廻向の利益には　還相廻向に会入せり
南無阿弥陀仏……



生れた時、達者な者は生きして居るので老病死も隠れて見えない。

老人、此時は老が主になりて居るから老人と名く。

病人、此時は病が主になりて居るから病人という。

生老病死のこの四は離れるものでないので主となり、伴となり、顕となり隠となりて居るのみでみな同様なものに候。生れたと云うて慶び、達者なと云うては自慢をし老人になりたと云うて少しづつ悲しみ、病死に遇うては驚き悲しむ。これが此世の有様に候えば、有様にして置いてもなんだか妙なものに候。

人間は不定の世界なり、極楽は常住の国なりとあり候えば、その味わいの幾分を思い浮べれば、世間虚仮、唯仏是真に候、南無阿弥陀仏……

自分にはどうしても病人と云う自覚が起らない、土肥博士や其他医師が病人じやと云う、道友諸氏が医師と一処になりて病院に入れたのである。医者が病気がありますよと言われた言葉のままにまかして、そうであるかと信じ命のままに治療を受けて居るのである。

煩悩具足じやと五逆十悪の罪人と云う自覚は起らぬで仏が煩悩具足じやと言われたから煩悩具足となりたのである。御言葉のままである。歎異鈔九章に『仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよ〳〵たのもしくおぼゆるなり』とあり候。

ある婦人が、煩悩具足の凡夫じやと云われたのであるから心配はいりませなかつたのでありますなーと言うた全くその通りに候。

煩悩具足じや、それを助けてやるのじやと、その言葉のままになり、その言葉を信じ仏の命のままとは何と云

う難有いことにあらずや……南無阿弥陀仏……
土肥博士は我を病人にした、仏は我を煩悩具足にした、したのではない前から病気もあり、煩悩具足でありたのであるが智慧が足りないから知らなんだのである。いよいよ智慧と慈悲との如来が難有くなり申し候、南無阿弥陀仏……。

菅瀬・近角両師の筆談録

（註）菅瀬・近角両先生の筆談を謹写してお送り申上げます。菅瀬先生は既に命旦夕に迫つて居りながら悠々とした気持で、「まだ病がさほど進んで居らんからさほど有難く感じない」等と書いて居られます。近角先生は菅瀬先生の命旦夕に迫つて居られることを知られて取り詰めた慈悲のやる瀬なさを書いて居られます。全く人としてこれ以上の真剣な、しかも偉大なる対話があるでしようか。しかもお二人ともに法味に浸された親の慈悲に始終感泣せられた記録であります。云々　西本清人記。

勿体なや乗彼願にて到彼岸　（病名　上皮癌）
強頑の坊主も癌で願往生

香川県　白峯　（意味不明）
入院后　六百目　（入院后六百目痩せた意）

一千万円ヲカケ十余年経営して
支那人千人
日本人十三人　（撫順）
炭坑口密閉

当時撫順炭坑が爆発して大惨事のあつたことを云われたものと思われます

○蓮如上人　先生より定まれる死期を急がんも返りて愚かにまどいぬるかとも思いはんべるとあり候、成る可く加養して此の五濁悪世に於いて御報謝をさして貰いたく候
　　〈以上　菅瀬先生〉

○世の中ニハ健康のつもりのものが忽にして頓死することもあり、病の人は随分長生することもあれば、信の一念に命終に候えば、其上は唯仏の御計いに任せ奉るばかりに候

○併し健康のものは無常を忘れて居るを気付かせていただき、病の人は死なんずるやらんと心細くおぼゆる心根を飽くまで察したまう如来聖人の仰を一入身に泌むことと存じ候

○数年前、病床にありし人、先日危篤の時、歎異鈔第九章を力としてイカニモ安心致し候様子を見て、却て聖人の仰せを事実的に見せて貰い候。併し心細ければこ

そこれを察したまう御慈悲が一入難有き事と存じ候。寒い時ニハ火が何よりのたよりに候、心細き時は其心細き心を察して呉れる御慈悲が一入に候

○福間（氏は神戸で貿易商の成功者、近角菅瀬の両先生に導かれて癌病で苦悩の末信仰に入られた人）が、トテモ覚悟が出来ぬ、アキラメラレヌと申されし時、其アキラメラレヌ覚悟の出来ぬのを無理はないと仰せ下さる御慈悲であると申した時、大いに感ぜられしも此処と存じ候。
　　〈以上　近角先生〉

○　往生一路平生決　今日何論死与生
　非好蓮華界裡楽　還来娑界化群萌
　　法霖大徳末後偈

南無阿弥陀仏の廻向の恩徳広大不思議にて
往相廻向の利益には還相の廻向に廻入せり
　　〈以上　菅瀬先生〉

○報仏報土ということは、其時にアラザレバ分カラネド我等を憐愍して下さる御慈悲の塊と存じ候。大悲の誓願に酬報する故に真の報仏土というとの意味

○ドウシテクレルカユキテ見ネバ分カラネド飽くまで見捨てぬとの御真実が分かればアナタマカセ〳〵
　　〈以上　近角先生〉

○あくまで見捨てぬ御慈悲、往生を誓われた往生浄土が難有し
　　〈以上　菅瀬先生〉

○信は願より生ずれば念仏成仏自然なり
自然はスナワチ報土なり証大涅槃ウタガワズ
最後マデイソギ参リタクモナク、心細クオボユルココロヲシロシメシテ待受けたまう御慈悲の力ニテ、喜ばぬにて往生ハイヨ〳〵一定トオモイタマウベキ也
　　〈以上　近角先生〉

○未だ病症がさほど進み居らざれば心細くと云う事にはならず
　　〈以上　菅瀬先生〉

○道楽者がマダ金ガアル、モット窮せねば帰ル気にナラヌト思フ様ナモノ也
　　〈以上　近角先生〉

○此れが強頑の坊主の処ならんと信ずるで、よく〳〵煩悩強盛にこそ
　　〈以上　菅瀬先生〉

○その煩悩熾盛の強頑坊主がもつとも可愛想なとの仰せとあれば頭が上らぬ
併し、アナタヨリハ私ハ大強頑坊主也
　　〈以上　近角先生〉

○ 強頑
強癌
強願
業癌
業願

メて南無阿弥陀仏
→ ＜ココハ菅瀬先生＞
＜近角先生書き足さる＞

○福間サンノ癌ヲヨク見舞ワレタアナタガ又癌ニナラルルトハ如何ナル因縁ニヤト存候
併シ、アナタノ癌ハ悩ノナイハ是亦不思議ト存候
＜以上　近角先生＞

（註）これに年号がありませんが、入院せられたのが大正五年の秋で、逝去が大正六年四月五日でありますから大正六年の始め頃であろうと思われますが正確ではありません

＜追　記＞

以上二篇は、岡山県吉備町の西本清人・清三の御兄弟からお教え頂いたもので、誠に貴重な法語であります。

菅瀬先生は広島県の寺院の御出身で、青年期には法隆寺の佐伯定胤師と唯識を学ばれ、東京に出られては同和学園という学生寮を創立せられました。同園で仏縁を結ばれた方々は明治大正昭和にかけて尊い活動をせられた方が沢山あります。ことに神戸の紳商、福間久米吉氏が癌になられ苦悶の末に仏陀の大悲を感得され、一家をあげて法喜の花が咲きましたが、その慈育に菅瀬先生のお骨折りは大変なものがありました。併し先生も亦癌疾のため遂に念仏の息をひきとられました。

＜花田記＞

白骨感　　源信僧都

夫この白骨を観ずるに我とやせん、我に非ずとやせん
我に非ずとせば身を離れず、自他共に白骨なり。死すれば白骨のみ残りて野辺にあり。我よわい若干ぞや。
白骨をあらわさんこと須臾にあり。悲しい哉白骨を省みずして名利の心のみ常にたえず、死して白骨をあらわすのみならず、今身の中に白骨あり、手をもて撫でふるるに何ぞ疑わん。つら〳〵一期の栄華を案ずるにこの白骨を愛して年月を送りぬ。白骨に衣裳を飾り、白骨の身をもつて世を渡ると雖も、此白骨も亦久しく世にあらず、頼み難きはこの薄皮ひとえの白骨なり。
唯願わくば仏の白骨を憐み往生を遂げさせたまえ。

ルーテルと親鸞

福島政雄

九、自由と無碍（その一）

自由という言葉は近代の西洋のモットーであり、今日の社会の通有語のようになつている。西洋では自由の揺籃は古代のギリシヤにあると言われている。それはアテネを主として言うのであつて、スパルタなどでは生活が自由であつたとは言えない。アテネでも婦人の生活が自由であつたとは言えない。それでも自由ということは近代の西洋において特に著しく叫ばれるようになつたのである。中世の束縛を脱して近世の自由の生活が始まつたという。その自由というのは極めて相対的なものであり、相手の束縛から脱するということである。ミルの自由論などは政治上自由ということを中心問題としているようである。政治は極めて相対的な人間の働きである。

然らば此の間においてルーテルが唱道する宗教上の自由というのは如何。ルーテルの宗教改革はローマ法王の束縛を脱するという結果になつているから、これも相対的の自由であるか、そうではない。ルーテルにはキリスト者の自由という注目すべき論文がある。これを読んで見るとその心持は相当に深い。その自由というのは外面的自由ではなく、内面的自由ともいうべきものであつて、霊の自由である。それは次の二つの事の融合であるという。

一、キリスト者はすべての上に君臨する帝王であつて、何物にも隷属しない。

二、キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であつて、一切人に隷属する。

この相矛盾する二つの事が融合するところに自由ということが成り立つという。

霊と肉とを峻別して考えている。肉体が如何なることを行つても、霊の世界とは没交渉であるという。如何に立派なことを行つても、断食や、徹宵や、烈しい労働など行つても、それは霊と何の交渉も持たない。王冠を戴いても、乞食をしていても、また司祭のことを行つていても、それ

は霊と何等の関係のないことであるという。霊はこれらを超越して先ず自由の世界を開かねばならぬ。その自由の世界は信仰によつてのみ開ける。信仰というは神の言葉を信ずることである。神の言葉はキリストによつて我等に伝えられている。

我々はキリストに全信頼するという信仰によつて、善も悪も、罪も汚れもすべて我々自身の責任ではなくなつて、キリストがすべての責めを負われているのである。このキリストを信ずることによつて我々は霊的に自由になる。名誉も利益も罪咎も、我々の心の中心問題ではなくなる。そこに霊的自由の世界が開ける。この世界が開けて来れば、キリストが霊界の王者であると同様に、我々も霊界の王者である。どんな利欲のことに誘われても、どんな苦悩の中に落ち込んでも、我々の心は動揺しない。キリストへの信頼は我々の霊を絶対自由にするというのである。

これは立派な境地である。併し肉体はどうなるのであるか。霊界においては自由の境地が開けても、肉の問題は残る。此の世のいのちの続く限り肉の問題は続くのである。そこでルーテルは、肉を霊に従順ならしめるために、肉体の鍛錬を行わねばならぬという。ここに断食や徹宵や労働ということが意義あることになる。一切人に隷属するということは肉体の関係の上で云つているようである。霊の自由によつて善を行つても善に誇らず、肉の誘惑に逢うても鍛錬によつて欲望をやわらげ、しかもすべてはキリストへの信仰によつて成り立つことであるから、すべての誉をキリストに献げ、一切の人々の僕従となつて肉の鍛錬のことを続けて、死に至るまでたゆまないという心持であるようである。

これは立派な自由の境地である。古代ギリシヤの哲人プラトンは精神に従順なる肉体を作れといつている。これは至言であつてプラトンはこの境地を肉体の鍛錬としての教練と、精神を和らげる音楽によつて開くことを考えているようである。然しプラトンにあつても肉体を超越したイデアの世界が真の自由の世界である。ルーテルの考えには芸術的要素は無いようである。その代りに十字架のキリストへの全信頼ということがある。

現代の声は、闘争によつて自由を獲得するということにある。ルーテルの言うような自由の境地が現代人にどれだけ開け得るのか。それは問題であろう。併し内面的自由ということは現代人にも大切なことである。内面的自由の境地が開けて来れば闘争の中にも平和があることになる。併しそれがキリストの十字架によつて開かれるということは現代人の幾人に可能なことであるか。霊と肉とを峻別すれば、霊と肉との闘争ということになる。今一歩進めて、無

碍の境地というものが開かれないものか。現代の生活に即して、無碍自在の境地が開かれないものか。これが大切な問題となると思うのである。

（昭和三十三年七月二十四日　稿）

十、自由と無碍（その二）

ルーテルにおける自由というのは、肉と霊との対立問題にもなつているようである。霊は自由であるが肉は自由ではない、此の肉を鍛錬して自由ならしめねばならぬということであるらしい。

霊肉の対立問題は西洋ではプラトン以来のことである。然るに仏教では自由という言葉をあまり使わないで、無碍という。西洋の自由と云う言葉が何となく相対的な意味を持つているのに比ぶれば、仏教の無碍という語は絶対という趣がある。親鸞の無碍という語は主として華厳経からきているようである。一切の無碍人は一道より生死の迷いを出でた、その一道というのは一無碍道であつて、無碍とは生死即涅槃ということであると述べられている。無碍人というは仏陀である。

生死即涅槃といえばむつかしいことにもなるが、わかり易く云えば、この迷いに満ちた人生において、永遠の心の落着きを得るということであろう。そこには霊と肉とが対立してはいない。霊と肉とが融け合つて無碍の状態にあるのである。親鸞は霊という特別な純粋なものを考えてはいない。自分は全く煩悩のかたまりであると感じている。その煩悩のかたまりである自分のいのちの底まで徹してくるのは仏陀の永遠のまことである。そこに無碍という味わいがある。仏陀は特別の霊界の存在というのではない。もし霊と肉というならば、両者を融合させて永遠の慈悲と智恵として、我々の生命に徹してはたらいているものである。

不断煩悩得涅槃と云い、煩悩即菩提と云うのは、我々の生命と仏陀のはたらきとが離れたものでないという意味である。そこに無碍という趣がある。仏陀のはたらきの前には何物も障害とならないというのである。

歎異鈔には「念仏者は無碍の一道なり」という有名な言葉がある。非常に強く感ぜられる言葉であり、青年の感激を惹き起す言葉である。これを「念仏者は」と読むか「念仏は」と読むかということについて、その道の研究者になかなか論があるようであるが「念仏者は」と読む方が面白い。いわゆる人法一如の境であつて、念仏申す人は無碍道そのものを体得しているひとというのである。換言すれば仏陀の慈悲と智恵とのまことの生命が、念仏者の身に入り満ちているというのである。観無量寿経に云われてあるように、仏陀は一切衆生の心想の中に入つているのである。

念仏者は無碍の一道と一味になつている。「唱うれば仏もわれもなかりけり」という境地である。

なお歎異鈔では「信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も業報を感ずること能わず、諸善も及ぶことなき故に無碍の一道なり」と述べられてある。非常に強い語である。これはルーテルの、キリスト者はすべての上に立つ君主である、という語と似ているが、その心境はちがう。親鸞には、一切の上に立つ君主という心持はない。無碍は、仏陀の無碍であつて、自分の自覚においては障害多き煩悩の身であるから、自分としては合掌、帰依するばかりである。その自分に、仏陀の無碍のはたらきが徹してくるのであるから、自分は全く仏陀の悲と智との懐裡にあるのである。仏陀の無碍のはたらきが、障害多き身を融化して無碍の心境を開く、そこに念仏者は無碍の一道なりという味わいがある。

天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍せずというのは、念仏者の合掌帰依の前には如何なるものも合掌せざるを得ないようになるというのである。天地人生の一切が無限のまことに帰依するという大平和の世界が出現するのである。

無碍光の利益より威徳広大の信をえて
かならず煩悩の氷とけ即ち菩提の水となる
罪障功徳の体となる氷と水の如くにて

氷多きに水おゝし障り多きに徳おゝし

これは曇鸞大師の讃歌の中に親鸞が無碍を讃ずる節である煩悩の障りが多いほどます〳〵無碍ということが味われるというのである。

ルーテルは、断食とか、徹宵とか、労働とかの鍛錬によつて身心の自由の境地を開こうとしているようである。親鸞の無碍の心境というものは鍛錬によつて開かれるというようなものではない。それは仏力廻向によつて開かれる。仏陀の力を賜るのである。その仏力廻向は一心帰命の裡にある。そこに念仏があるのであるが、念仏そのものも仏力廻向である。それ故にこそ無碍である。

親鸞にこの無碍の境地が開けはじめたのは、勿論法然に接して以後のことである。その後の親鸞の生活には障害が相次いで来るという有様であつた。その間にあつて、親鸞はいよ〳〵深く無碍ということを味わつた。前にも述べたとおり、ルーテルにはローマ法王に対して戦うという心持があつた。親鸞には叡山やその他に対して戦うという心は微塵も無かつた。色々の障りの中を歩みながら、その全生命が常に無碍の境地に通つていた。

晩年の親鸞の心持は最もよく自然法爾という言葉であらわされているが、これはすこしも無理がないということである。善悪という批判の境をも超越して「行者のよからんともあしからんともおもわぬ」境地である。否々自然という語をさえ超越した境地である。「この道理をこころえつるのちには、自然のことはつねにさたすべきにはあらざるなり」といわれている。しかも自覚の上にはおごそかなものがある。

無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども
弥陀の廻向の御名なれば功徳は十方にみちたまう
功徳が十方に満つる、それが無碍の境地である。

（昭和三十三年八月十六日　稿）

十一、個々円成

ルーテルと親鸞とを対照して、その信仰の境地まで述べて見ると、両者が非常に似通つている点があるので、そこから現代人の理知にかなうような信仰が建現するのではないかと考える人もあるであろう。ルーテルは「我が手を洗えば洗うほどきたなくなる」と言つている。親鸞は「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と告白している。この両者は手をとりあつて一つに融けることが出来るように見える。ルーテルは神の恩寵ただ一つで救われると言い、親鸞は仏のお慈悲だけで助かるという、非常に似ている。

併し今日の文化人、知識人と称する人々が若し信仰を求めるという立場において、この両者を打つて一丸として満足な境地を求めようとするならば、これは無理な願いであろうと思う。宗教を理知で解釈しようとするならば、それは宗教哲学というものになつて、宗教的信仰の対象ではなくなる。もちろんキリスト教にも宗教哲学があり、仏教には仏教の哲理がある。哲学とか哲理とかいうものは知識の対象にはなるが、信仰の対象にはならない。

ルーテルがキリストの十字架によつて神を信仰するというのは理知の沙汰ではない。今日の知識人の理知では理解出来ないことがルーテルの信仰の内容にはある。信仰は理知以前のことである。ルーテルはローマ書を読んで「義人は信仰に生きる」ということがわかつたというが、そのわかるということの前に、ルーテルの宗教的体験があつて、それがローマ書において開かれ、明らかにせられたのである。単に理知で読んだのではローマ書は知識となるに過ぎないであろう。

今日は科学偏重の時代である。何でも科学的でなければ真実でないとせられる。併し今日の生活においても知識以前の信仰がある。子が親を親としているのは、親を信じているからである。科学的に血液検査や遺伝の研究をした上でなければ自分の親を親と思われないという人があるならば、その人はどうかしているのである。親子の関係は信の

上に成り立つものである。信が成り立つて後には親子についてその関係を論ずるのもよろしかろう。親孝行の哲理があつてもよろしかろう。併しその出発点はあくまでも信にある。

親鸞の信に入るのは体験の上から入るのである。それは親鸞、または親鸞の信に入つた善知識を縁として体験を開かれるのである。これを仏々相念という。仏と仏とのひびきあいである。神秘的なことではなく、生命の深い相互感応である。法蔵菩薩といい阿弥陀如来というは、その感応の上における生命の深い響きであつて、神話でもなければつまらぬ作り話でもない。親鸞の上において、久遠のまことを我が身の上に感ずるとき、法蔵も弥陀も我が胸にひびき、よそ事ではないということになる。キリストの十字架も同様であろう。

併しキリストの十字架と弥陀の本願とが同じであるとは言えない。それ〴〵独自の世界であつて、あちらにも行きこちらにも行くというわけには行かない。私は親鸞の信仰の上からルーテルを理解し得る限りにおいて書いているのであつて、私のルーテルを理解する程度は甚だ不十分であると思う。

世界の宗教、または思想は理知によつて統一せらるればよろしいというようなものではない。それが正しい宗教、正しい思想である限り、それぞれの立場に意義がある。互にその立場を尊重するのが本当である。富士山に登るのに誰も彼も御殿場口から登るようにせねばならぬという法はない。それぞれの縁や決定によつて、それぞれの道を登るのである。併し山頂に達すれば一つに合するであろう。宗教においても各人の縁というものがある。その縁によつてそれ〴〵正しい宗教に入る。その入るにはまた機縁があつて、機縁によつて心が開ける。或は転迷開悟と言い、或は信心開発と言い、その趣はそれ〴〵ちがうのであるが、その転機は理知の問題ではなく、生命の感応というようなことである。キリスト教ではパウロの場合などその著しいものであろう。またいつの間にか徐々に夜が明けたという場合もある。心が開けて来れば、その心境を中心として他の宗教や信仰の立場を或程度までは理解し、その立場を包容することが出来るようになる。これが大切なことである。妄りに排他的になる宗教は、宗教として偏している。仏教の日蓮宗などでは、一天四海皆帰妙法などと云うが、これは世界統一というような意味ではない。法華経の広大な包容と統一であつて、それは世界を一色にしようというのではない。親鸞においては殊にその包容の趣が鮮かである。惟うにルーテルもまた決して妄りに排他的ではないであろう。

仏教の言葉で、人々個々円成という。人々各々その地位と信仰とにおいて円満成就するというのである。ルーテルに導かれて円成する人は、その方において御縁があつたのである。親鸞の教に導かれて念仏申すようになつた人は仏縁が深かつたのである。縁ということは大切なことである。互に縁を理解し、相互に立場を尊重し、お互に個々円成して平和を建現することが、何れの宗教としても理想である。理知のはたらきも必要であるが、徒らに理知を弄して理知的統一の宗教を作ろうとすることは徒労に終るであろう。「この人間の世界には汝の哲学において夢想せられていることよりも、更に以上のものがある」というハムレット劇の中のあの有名な言葉は、この場合にも意味があるのではなかろうか。

ルーテルと親鸞については、まだ考えて書いて見たいこともある。併し今までに書いたことがあまりお役に立たなければ、このあたりで一応筆を擱いても宜しいと思う。私としては少しでもこの問題について考えをまとめさせて頂いたことを有り難く思う。

（昭和三十三年九月廿六日　稿）

木喰さん

木喰さん、木喰さん！
ゆつたり何時もほほえんで
旅から旅へ　木喰さん！
餓をしのぐは木の実だけ
笠に杖つき草鞋ばき
有縁の地には足を止め
仏像刻み　堂つくり
「一日も多く居て下されや」
村人から慕われつ
他人の乾いた心をうるおして
ハイハイ私の用は済みました
皆の衆や左様なら　無事でのう
木喰さん左様なら　御機嫌よう
笠と杖持ちまた遠い旅——
むかし　むかし　これの世に
生きていられた　木喰さん！
——木喰像を朝夕仰いで、某坊守。

池山先生聞記

花田正夫

（まえがき）先生の二十八回忌の一道会に風邪に障えられて欠席のまま、ひとり草庵に秋雨を聞きながら、かつて先生からお聞きしたことや、法友から伝聞しましたことどもを心に浮ぶまゝに前後もなく誌しました。それを二百号の記念の一つにさせて頂きます。ただし、先生のお言葉が私の耳垢、手垢によつてあまりにも汚されてはおりますが、御賢察の上、洗除して下さいますようお願い申します。

○

「池山におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」

この一句を、先生にお会いした初めから、お亡くなりになる日まで、何時でも何処でもくりかえし〳〵お聞かせ下さいました。それというのも、先生四十二歳の時、人生問題の大疑団に逢着せられた時、歎異鈔第二章のこの御文が心に浮び、「そうだ！　私も聖人と一緒に！」と信界に踏みきられ無上浄信の曉を体験せられたからです。

それは法然上人の四十三歳、智目行足を欠く身と知られた大苦悩の底に、善導大師の「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」の一句に、「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と信眼がひらけて、一道に皈られたのと全く規を一つにされたものです。

同時にまた二十九才の親鸞聖人が、よき人法然上人をお訪ねして聞きとられた信体験のそのままでありました。

○

或年の夏、先生が鞆の明円寺に着かれた時

「寺はいゝなあ、寺はいゝなあ……」

と歎ぜられるので、松江岩人師がそのわけを問うと

「誰にも気兼なしに、内に湧くまゝにのび〳〵と念仏が称えられるから」

とのことであつた。先生は学校では出来るだけ念仏をおさえて

居られた。それでも何かのキッカケでフト念仏が出ると、ナアー、ナアーと、流されたので「また池山さんのナアーが始まつた」と教授仲間の定評があつた。おさえてもおさえてもつい浮かび出る自然の念仏、それを教室や、廊下で耳にした者は多かつた。初めの程はそれに奇異の眼を見張つた学生達も、月日を重ねるにしたがつて、先生のお人柄が次第にわかつて段々親しみを感じるのが常でした。

それが寺に行かれたのだから、のび〳〵と朗々と念仏を称えて、その快味を喜ばれたのである。

○

「衆禍の波転ず、と聞いていたが、家内の胃癌で、手術も不能と知らされて、にわかにあなたのお慈悲に気づいて念仏申すようになり、心の底から打ちとけてお慈悲をよろこばせていただけるようになつてから、この言葉を体験的に味うことが出来た」

と語られました。

先生の還暦の頃、歎異鈔の第七章、念仏者は無碍の一道なりの一章について

「歎異鈔を繰り返し読んでいると、アソコ、ココと体験的に味わえるようになる、何のことはない腸詮のように充実した言葉となる。この七章も、六十の今日、一語一語を体験的に味わうことが出来るようになつた。

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

これは現在から未来へかけての無碍の一道の光景

慘怛たる悔いの残せし一一の跡かたもなき無碍の一道

これは、過去に働く無碍の光益である。」

と述べられて、

「尤も、天神地祇も敬伏し、の天神地祇は概念としてはわかるが、それ以上は出られないがネ」

と加えられた。

○

先生が我々に、これ一つは是非にと手渡したくてならなかつたのは、歎異鈔一巻であつた。或時、次のように語つて下さつた。

「淀は時鳥の名所ときくが、まだ行つたことがない。京都に住むようになつて、夏の夜など異様な声を遥かの空にきいて、多分あれが時鳥かと思うが、確かな人から教えられないので断言は出来ない。

しかし本願の勅命の声は聖人を通して聞かして頂いている。藤村の詩に、耳を立つればなつかしや、あなたこなたに木がくれて、鳴く音をもらす時鳥、とあるが、歎異鈔は如来の声をきく名所だ。聞き耳立てていれば、あなたこなたに如来の声が聞こえる。」

○

苦悩を越える道として、ゲエテは、苦悩にあうと〃待つていました〃とそれを迎え、ニイチェは、力の宗教の提唱者とて〃わがのぞむところ〃と問題に立ち向う。

さて念仏者は、本願のたのもしさから〃さるべき業はさもあらばあれ〃と業報を受けとめて、それに随順する道がひらける。これでは如何なる苦悩も、そちらの方が根負けするだろう。

○

無碍ということは、さわりが無くなつてしまうことではない、身にもつ業のある限りさわりは続く。その碍りがあるまんま、さわりがさわりでなくなることだ。

○

煩悩をぬきにした信楽は便所のない別荘だ。どんなに立派な別荘でも、天人はいざ知らず人間である限り臭く穢い便所が無くては住めない。煩悩あつての念仏だ、それでこそ他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり、とやすらげるというものだ。

○

始終くりかえす私の経験では、何か大きな問題にブツつかつて、暗くなつたと思う矢先、何かのキツカケで、遠くに灯台の光を見出すように、心の中に一縷の光明がさしてくると、だん〳〵明るい世界に出されてくる。

歎異鈔の「わろからんにつけてもいよ〳〵願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし」の、あの繰り返しである。

○

昭和の初め、藤原あきさんが、主人と子供二人を捨てて藤原義江氏のもとに走つた時、社会の各方面から非難の声がきびしかつた。念仏申す人々の間にもはげしい批判が出た頃先生は、

「あきさんの行動は決してよいとは言えぬ、然しながら念仏の上からは、あの人だけが悪人で、自分はあんな馬鹿なことはしないなどとは言えない。共に八万四千の煩悩の持主である点では同類、共に凡夫である、唯そうした業縁が無いからそうしないと云うだけで、業縁如何ではどんなひどいことをしでかすか分つたものではない。

又一切衆生を我が一人子とみられる如来の心から云えば、みな同じ御親のきようだいである。

更に仏陀の善巧に催されて、あきさんが如来の本願に気づくことになれば、われらの大先達となるのだから」

と念仏の中から述べられました。

○

先生の岡山時代のことであつた。或宗教雑誌に、U教授の談と

して、

「ここに一箇の握飯がある。これを食べないと餓え死ぬという場合に、二人の人が立つたとする。ところが西田天香氏は善人の宗教とて相手にスツカリ与えるであろう。曉烏敏師は悪人の宗教の主唱者だから相手から皆奪うであろう。私は凡夫の宗教の立場として、二人で半分づつ分ける云々」

と発表した。ところが戦場で、生き死にの境を彷徨した人から、U教授の説は机上の空論であるときびしい駁論が出たので、それが私共学生間の話題になつた。そこで先生にそのことをおたずねすると

「その時が実際に来てみないと何とも云えない。場合によると相手を殺しても奪うかもしれないが、反対にサラリとくれるかもしれない……」

と答えられて、私共は納得させられたことがある。

○

奈良に下車すると、道々に沢山の客引きが声をかける

「手前の旅館で休憩なさつては」

「静かな座敷が沢山ありますが」

「お湯で旅の疲れを流されては」

と。然し、一文無しの旅行者には、それらの呼び声も空しく聞きながすばかりだ。

○

世界に無数といつてもよい教はあつて、実に引手数多の感に堪えない。だが「曾て一善無く、唯悪のみを作る」身には、どの声も空しい。

ただこの文無しを承知の上で、何処までもよりそうて、迎え容れて下さる声こそ真実の教である。

○

自分を知るよい方法の一つは、ありのまんまの心の日記をつけることだ。他人に見せるのではない、書いてスグ焼き捨ててもよい。其日々々の自分の行動とその際の心の動きをそのまゝ誌すとよい。それを見てわれとわが身に驚かされる。

○

六高の講堂に「褥に恥じず」という額があつたが、或時先生は

「あゝしたことが言える人は、一度も自分をふりかえつたことの無い人だろうね」

とつぶやかれた。

○

教師が転任とか退職の際に「この年月、大過なくしてすごせたのは、皆様のお蔭で云々」とよく挨拶するが、私はどう間違つても、あれは言えないね、一日の生活だつて全く冷汗ものだよ。

○

日本の近海に深さも知れない深海があるときくが、一寸想像もつかない。唯高い山、富士とか新高とかを指ざされて、あの山の高さ程深い、ときけば想像も出来る。

如来の深いお慈悲も、我々の罪業の高さをもつて想像する以外には測りようがない。さればそくばくの業のもちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ、と。

○

母に対して何一つ孝行らしいことをしたことのない私にも、平生歎異鈔を一緒に読んだということだけは唯一の快い思出である。今になお歎異鈔を読むときには母がそばに居られるような気持がする。

しかしことわつておくが、今日は一つ母のために読んで聞かせてあげようというしおらしい考えから読んだことは一遍もない。ただ自分が読むついでに聞かせたというまでのものであつた。

○

世間に火災保険安心というのがある。平素何事もない時は、これで何時火災があつても大丈夫と落着いているが、イザ火災となると、せめて金庫だけは、衣類だけは、等々と気も動転して大騒動となる。

○

ニイチエは、その著、超人、の中で

「お前方は超人を信ずるというのかい、超人が何だ！お前方はお前自身を見出す前に超人を信じたのだ！世間大方の信者はそんなものだ、だからみんな駄目なのだ」

と警告している。

○

ニイチエが、われとわが身を見下げはてる、という自身のことを告白して

「自分は牡蠣のようだ。外面はいかめしい殻で包んでいるが、その中味は、ドロリとした、得態の知れぬ鼻汁のようだ」と。

○

又ニイチエは、師弟のことについて

「師よ、師よといたずらに追従することが本当に師につかえる道ではない。すみやかに師の冠を取れ！　その時こそ師が心からよろこぶ時だ」

と、告げている。

○

信仰は、見物人には無駄である。実演者にのみひびく。超人が山を下つて大衆を前に獅子吼する、

「人生は地上から天界に渡された一本の綱渡りである。

神にもなりきれないが、豚にもなりきれない云々」

と。然し、それを聞いて如何にもと共鳴したのは、大衆を前にして綱渡りの曲芸をしていた芸人だけであつた。傍観者には一向に空しい声であつた。

○

又ニイチエは、高士という題で、真理という獲物を片手にブラ下げて、われこそはと力み誇る人を評して、彼はまだ天使のバラの微笑を知らぬ滑稽者と笑つているが、これも他山の石の一つで、われ心得顔になつて、人を見下げることのあさましさを省みさせられる。

○

筍に傷をつけておくと、その時は目立たないが、やがて大きな竹となると、その痕がハツキリとあらわれる。

真実の教を聞くのもその通りで、聞いた時はさほどに感じないでそのまま忘れてしまうこともあるが、聞いてさえおれば決して消えてしまうことはない。何時か時節が到来すると、あゝこれであつたか！と必ず自得されるものだ。

○

久遠このかた子故の廻向わたし一人をかたおもい

これは次男が大手術の時、危険が去るまでみとりしていた時、病床で私のすることなすことが、親と子は二つであつて一つだなあと知らされた。それと共に、これは病む子だけじやない、私に五人の子があるが、その一人々々がかけがえがないのだ。

如来の慈悲も一切衆生の一人々々をかけがえのない、一人子とみそなわして下さる、その自然の結果が一切衆生が可愛いとなられたので、十把ひとからげではない。それをそれとも気づかないで、永い間のかたおもいをおさせしたものだ。

○

線路上に匐いあがつた幼児が、石ころを取つたり捨てたりして無心に遊んでいるとする。そこへ列車が轟々と音をたてて近寄つて来るが、怖れを知らぬ幼児は平気である。

この幼児を見たら、身の危険をもおかして救い出さずにはいられまい。

今、真実のさとりをひらいた方、それは地上では釈尊をはじめとするが、そのお方の眼には、我々の生活がこの線路上の幼児とうつるであろう。そこに、こちらはおねがいする力もないのに、あらゆる救いの手をさしのべて下さる

○

ザル碁程度の下手な碁を見ていると、それぞれ最善と思う手を選んで石を下すのだが、有段者の碁家から見ると、間違いだらけで、あぶなくて〳〵見ていられるものでない

私達が善し悪しを論じ合つているのも、大悲の御親のみ

こころには、あぶなくつて〳〵たまつたものではあるまい。

○

六高の親鸞会で月々先生の歎異鈔のお話を聞いたが、学期はじめには沢山の学生が集るが、学年末となると段々すくなくなるのが常であつた。その年も僅かに四・五人となつたので、先生におわびに行つた時

「今年は豊年だよ、一年を通じて五人も残つたのだからめずらしいことだよ」

とかえつてほめられ、慰められたことがあつた。ところが四十年もそれから経つた今日、当時の五人が、変らず聞法をしていることに気づいて、先生のお言葉は、その場限りの一時慰めではなかつたと知らされ、実というはかならずもののみとなる、という聖語も思いあわされる。

○

小春日の午后、ひなたに椅子を出して新聞を読んでいると、仔犬が足もとでジヤレていたが、急に静かになつたので、何処かへ行つたのかとさがすと、仰向けに寝ころんでいた。元来犬は警戒心が強いので、仰向けに寝ころぶことはめずらしい。ところが、天気はよし、主人は側にいる、何が来ようと安心と、つい本性を忘れたのだろう、大悲のふところに安心する信者のように

あおむけに仔犬ねころぶひなたかな

はその時の句だ。

○

猫はさほどにないが、犬は大好きだ。或日孫達と動物園に行くと、小牛位の獰猛な奴が柵の中でうずくまつていて誰が呼びかけても知らぬ顔で、見向くのもうるさいといわんばかりであつた。そこで私が近寄つて

「おい大将！」

と呼びかけると、ノッソリと起きあがつて

「何だ、お前かい」

と云った顔つきでこちらをのぞいた。これは私の犬好きな心が犬に感入したのだ。

信仰もまた感入だ。久遠このかた子故の廻向のまことが煩悩の私共の胸に感入して「かくの如きの我等がため」と味わえるのだ。

○

近角先生が大病になられて、一年間面会謝絶のままで過ごされて、やつと遠来の見舞客には面会も出来るまでに恢復せられたと聞かれた先生は、早速東京へ出かけられた。

その頃であつた。

「実はあの活動家の近角君が半身不自由な病気とて、どんなにか淋しがつているだろうと、気づかいながら病室に入ったら、案に相違して、満面のよろこびで迎えてくれた。先ず不自由な右手を左手で支えながら握手をかわした。そして開口一番〃自分は長い間信界建現、々々でやってきたが、教行信証さえあれば真宗は不滅である。また歎異鈔さえあれば今後思想がどんなに惑乱しても心配はいらぬと気づかされた……〃と、溢れるばかりの喜びで語っていたよ」

と如何にも満足された面持で話された。

○

諸善万行とならべて念仏をあつこう人は、弁慶の七つ道具の一つと見る人だ。

念仏を最高善として値ぶみする人は、桃太郎の鬼退治の際の吉備団子よろしく、これさえあればと尊ぶ。併しそれは絶対価値の念仏とは似ても似つかない。

○

念仏は粥である。罪悪深重、煩悩熾盛と名のつく、いかな名医も匙を投げる難病者のために特別工夫され、調理された粥である。米肉菜果等、普通の食物では消化できない胃腸の弱りはてた重病人目当の粥である。

この粥は、その重病人によって必需品で、それを外にしては栄養をとる方法は絶無なのである。

お粥でもいいではない。お粥がいいでもない。お粥でなくっちゃいけないのである。

○

ダイヤモンドは見る人の方向によってそれぞれ異った光彩を放つように、歎異鈔の金言も、同じ言葉であつても、それを読む者の立場次第に多彩な信光を味わうことが出来るものだ。

○

先生のこの世でのお言葉が失われようとして、まとまつたお言葉の最後のものは、

「何も残るものはない、何も残るものはない。ただ念仏だけが残ってくれる。ただ念仏だけが残ってくれる。偉いこったよ、有難いこったよ」

と、これは友子夫人が聞きとって下さったものでありました。

「たのむ」と「ねがう」　　誉田豊吉

いまだ出来ざることを、出来さしたいと思うが願いである。

向うに出来上ってあることを聞いて、やれ〳〵嬉しやと受けこみ、落ち付くを頼むという。それを頼んでからたすかるようにいうから後先となる。

おたすけを聞いて頼むのじや。「誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて」とあるおたすけを信ずるのである。　　信仰静観録より

あとがき

新春をことほぎ奉ります。

お蔭様で慈光も二百号になりましたので記念の編集をいたしました。

先ず近角先生の御尊父の御往生によって感得されました宗教的実験、涅槃の境界の信味、襟を正して頂きました。

又先生のお導きを常に随喜せられている和才様が貴重な法味を頒って下さいました。

時しもよし、岡山県吉備町の西本清人、清三の御兄弟から、菅瀬芳英先生の病中の書簡と、近角・菅瀬の両先生の筆談録（これは菅瀬先生の癌が悪化して言葉を失われたので筆談をせられたものです）を頂きましたので早速掲げさせて頂きました。西本様は十一月に広島の長兄、西本清吉様、と念仏裡の別れをせられました。謹んでお悔み申上げます。

福島先生の両聖を対照せられての自由と無碍、個々円成の御提唱によって、聖人の信境をいよ〳〵明確に教えられました。

池山先生聞記は何かにつけまして私の心に浮かび出ますことの数々を誌しました。皆様方のうちにも先生から聞きとられた法語を心にとどめていられる方々は何卒私共のために御送り下さいますようにこの際特にお願い申し上げます。

歳旦をまず訪るる念仏かな
念仏でまずすごさばや三ケ日

池山先生詠

法信抄

かごをかついで五十年姥捨山の初日の出かな　　都城堤繁

今日もまた念仏と共に生かせたまわる　　島根三瓶徳英

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半。
一道念例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル一丁半
三本目辻左入ル。
国鉄、笠寺駅下車。
名鉄、呼続駅下車。
毎月二十四日、午前、午后。
昭和区小桜町　教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。桜花学園東。

定価　半年　二百円（送共）
　　一年　四百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十八巻第一号　昭和四十一年一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可